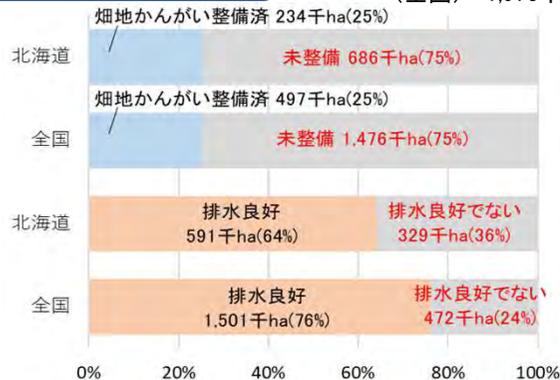


### 3 北海道の農業農村整備を取り巻く状況③ ～畑作・酪農地域の課題と農業生産基盤整備

- 畑作、酪農は、北海道農業の基幹部門であり、北海道の農地面積（114万ha）の8割（92万ha）は畑が占めています。
- 北海道の畑については、約40%が排水不良となっており、大型機械による効率的な作業を行う上での支障となっています。
- 畑作、酪農は、大規模化が図られ、ヨーロッパ水準の経営規模となったものの、コスト増など情勢変化にも対応し、引き続き、経営体の体質強化や地域の営農戦略に基づいた収益性の高い農業の実現などが求められています。

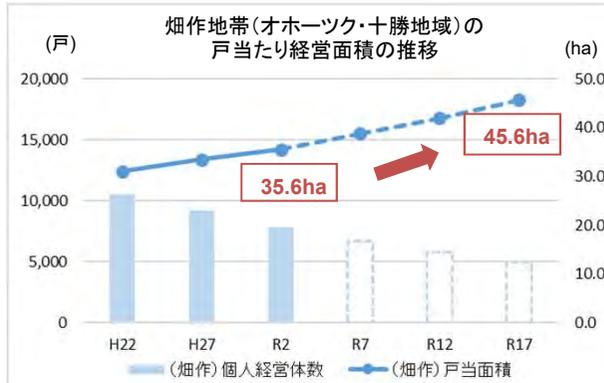
#### 畑の整備状況

畑面積（北海道）920千ha  
（全国）1,973千ha



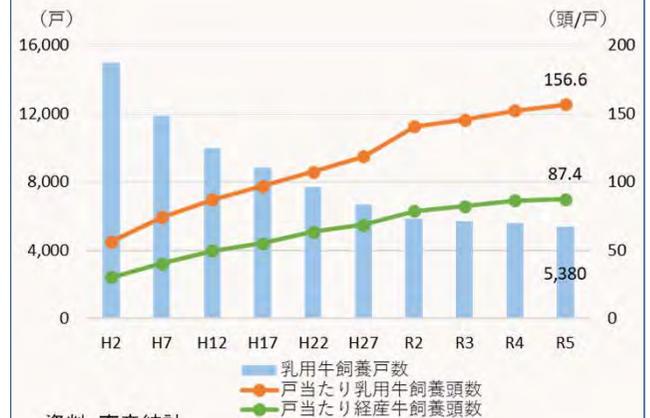
資料：農林水産省統計部「耕地及び作付面積統計」、農林水産省農村振興局「農業基盤情報基礎調査」(R4.3時点)  
※排水良好：4時間排除・地下水位70cm以深の水田

#### 畑作の規模拡大状況



資料：北海道立総合研究機構農業試験場資料（農林業センサスを用いた北海道農業・農村の動向予測 R5.11）より

#### 酪農家戸数と乳用牛飼養頭数



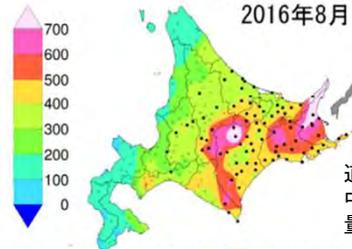
資料：畜産統計

#### ■気候変動の影響

##### <降雨強度の増加>

- ・平成28年8月は道内に3つの台風が上陸するなど、記録的に降水量が多かった状況。
- ・被害を軽減し、また適期に農作業を行うためには、排水整備、ほ場の排水性改善が不可欠。

月降水量 (mm)  
2016年8月

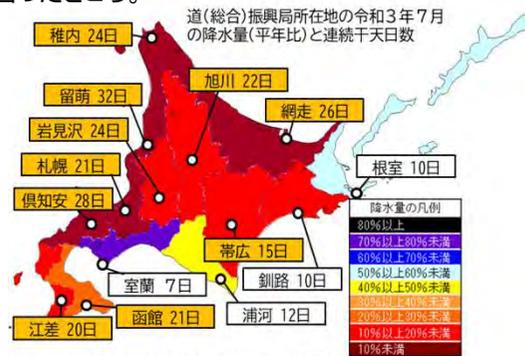


道内アメダス225地点  
中89地点で、月降水量1位を更新

● 統計開始以降で1位を更新したアメダス地点。  
× 更新しなかった地点。

##### <干ばつの発生>

- ・令和3年7月には降水量が極端に少ない干ばつが発生し、道内の広い地域で連続干天日数が15日を上回ったところ。

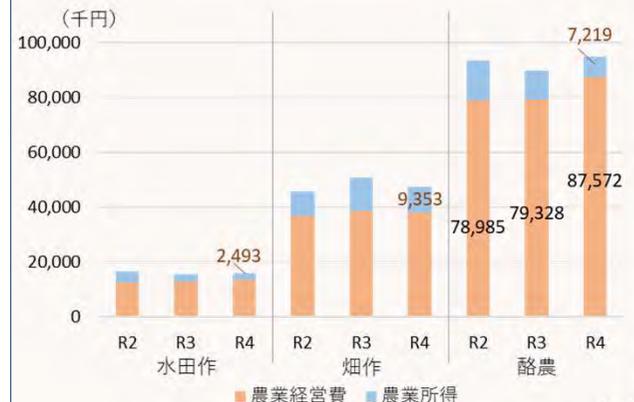


出典：アメダスデータをもとに北海道開発局整理  
注：連続干天日数は、地点によっては6月・8月にまたがる

注)連続干天日数15日以上は、ほ場の土壌水分がかなり不足している状態を示しており、かん水の1つの目安。

#### 経営状況の比較(個人経営体)

- ・酪農経営は、近年の飼料高騰等により経営費が増加している。



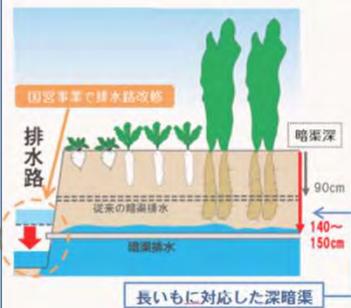
資料：営農類型別経営統計

# 【対応】大規模畑作を支え、高付加価値化を実現する農業生産基盤整備

- 地域の営農戦略に即した排水改良や畑地かんがい等を推進し、畑作農業の生産性の一層の向上、高収益作物の導入や輸出の促進などを通じた収益性の高い農業経営の実現を目指します。

## 排水整備により長いもの生産を拡大、海外に輸出(帯広市)

- ・高収益作物(長いもの)の導入を考慮した基幹排水路や暗渠排水の整備などにより、畑作物の単収の増加や高収益作物の導入を実現。特に「長いもの」は、平成11年度から輸出を開始し、ブランド品として確立。



ながいもの輸出(令和4年度)

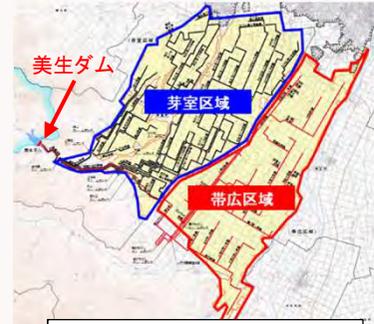
輸出量	約894t
輸出額	約3.9億円

※主な輸出国先は台湾、米国、シンガポールなど



## 既存水源を活用し広域的な用水を効率的に確保(帯広市、芽室町)

- ・芽室川西地区では、用水需要の変化に対応し、施設の更新整備とあわせて既存のダムからの用水供給範囲を拡大。新たに用水が確保される帯広区域では、加工用たまねぎ等の生産拡大を図る。



用水需要の変化への対応

芽室区域～営農の変化(小麦の増加等)  
帯広区域～畑地かんがいにに対する強いニーズ  
⇒美生ダムの用水を新たに帯広区域にも供給



干ばつによるてんさいの生育不良

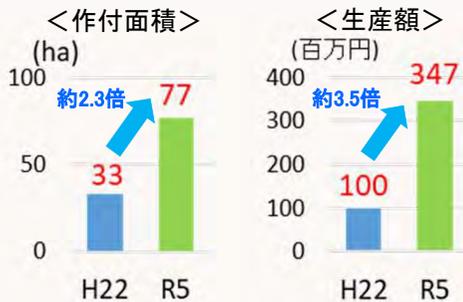


多孔管によるかん水 たまねぎの導入

## 農地再編整備を契機としたキャベツの生産拡大(鹿追町)

- ・農地再編整備による大区画化、及び排水不良等の解消により、キャベツ収穫の機械化を実現。キャベツの作付面積は約15年で2.3倍に、生産額は3.5倍に拡大。更なる効率化を目指し、キャベツ収穫機などロボット化に向けた研究を推進。

【鹿追町におけるキャベツの作付面積・生産額の推移】



キャベツ無人収穫機の実演状況

資料: JA鹿追町

## 農地再編整備を契機としたスマート農業の推進(津別町)

- ・畑の大区画化・傾斜改良及びJAIによるRTK基地局の設置により、RTK-GNSSの導入が拡大。また、位置情報を利用した可変施肥を実施し、肥料の使用量を節減。

【津別町におけるRTK-GNSS受信機の導入台数】



可変施肥作業状況

資料: JAつべつ

【可変施肥による施肥量と収量の差(秋小麦)】



資料: スマート農業実証プロジェクト成果(R1)

# 【対応】土地利用型酪農の持続的な発展のための農業生産基盤整備

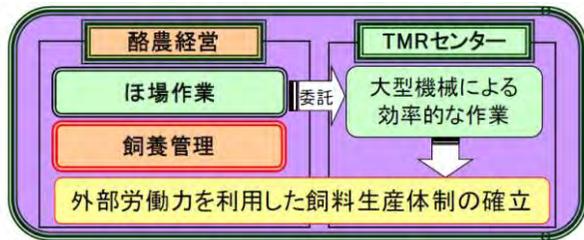
○ 国営農地再編整備事業等の推進により、効率的で収益性の高い農業の実現を目指します。

## ■TMRセンターとの連携による飼料生産体制の確立（東宗谷地区の取組）

・現状では、牧草収穫時期に恒常的な過重労働が発生し、酪農経営を圧迫。

⇨大区画化と併せてTMRセンターを設立し、TMRセンターが大型機械による一貫した飼料生産。

酪農家は、乳牛の飼養管理に集中できることで、品質、生産性を向上させ、効率的で収益性の高い酪農経営を目指す。



大型機械による効率的な作業



農地の大区画化(2.5ha→7ha)

・加えて、家畜統合管理システムを導入し、乳量、乳質、牛の健康状態など多様なデータを一元管理し経営改善



## ■国営環境保全型かんがい排水事業

・家畜ふん尿を肥料として有効活用することで牧草の収量向上を図り、自然環境と調和した生産性の高い飼料基盤を整備し、自給飼料生産を拡大。



### 高級アイスクリームに北海道産牛乳を使用（はまなか地区の事例）

・浜中町では、国営環境保全型かんがい排水事業の実施により、資源循環型酪農が展開され、徹底した土壌分析や生乳分析などと相まって、高品質な生乳が生産されています。

・脂肪分4.0%以上の高品質牛乳や高級アイスクリームの原料として高い評価を受け、収益性の高い酪農経営が展開されています。



写真：JA浜中町HP  
消費者へ安全、安心な牛乳、乳製品を提供するため、土壌分析、飼料分析、生乳分析を行い指導、改善

## ■農地の機能回復（国営総合農地防災事業）

・泥炭土壌に起因した地盤沈下のため、農地の不陸や排水路の流下能力不足が生じている。  
⇨自然環境との調和を図りつつ、農地や排水路の機能を回復。

＜サロベツ地区における湿原と農地の共生＞

○緩衝帯の設置



新設の排水路設置に当たり、湿原と隣接する農地に緩衝帯を設置し、湿原と農地の共生を図る。

